# 泰西進學初階

和文部
人31號
五冊

國語
42
124
1

No 263

春色連理棋序

人(ひと)まくらつばいろふかきなや
枕(まくら)通(かよ)ふ夜半(よは)の雨(あめ)
偶然(ぐうぜん)なれ梅(うめ)が
ふ詠(よみ)そしる
誰(だれ)ぞ名(な)
そ。寛(げ)
つよ梅(うめ)ハ
武士(もゝのふ)の
朝(あさ)

春色辰巳園初編序

1125?3

国語
1125?3

つの事だにも。色を黄金とし。
其のびを雄とせんと。
こしその事其こゝろ。
ふかく。
雄をもとめ。
雄ならんことを。
ねがふ。
其のきひ

袖で
面も
墨を
ふくらませ
二日酔
乃移香
小雨の地
肥溜の
ハ梅屋敷
二三軒。
面乃
煤払
音ばかり
其の
土み
そまる。
斗也
狂言
見ばや。
梅も

作者の主旨
里の作者
一枝の梅
二月に咲く
實のり
を
追ひ
花は其
後。
葉を
穗め

梅利の春

唇開くや梅の花

なでしこをも恵まん

うぐひすの

ひとこゑ

梅元が師判

花の雫を得意哉

ぎんげのしゃうきち

# 擬現著作者

おきく





うぐひすも
學の初音
もんやぬのこ
本梅奉公の娘達
ごろごろの
ねこ
胡蝶
きぐ
多の
梅奉公
むすめ
娘
お梅
春暮里谷二遠
うぐひすも
學の初音
里の
もんやぬのこ
本梅奉公の娘達
ごろごろの
ねこ
胡蝶
きぐ
多の
梅奉公
むすめ
娘
お梅
春暮里谷二遠
両個美人
多代女



よ
毒な
人形という
ものは
まあ
なんの
為の
ある
ものか
知れ
ない
が
夫
を
離
れ
て
独
寝
の
枕
元
へ
置
て
夫
の
よ
う
に
一
切
の
事
を
任
せ
て
寝
る
の
は
真
の
妻
の
ある
べき
ようも
なく
唯
人
形
を
抱
て
寝
る
ばかり
の
事
なり
て
初
まり
て
蓋
を
そ
ば
だ
て
ふ
解
脱
の
ま
ま
に
夫
の
体
を
枕
に
して
寝
る
ように
なる


いざ
美
しき
あきたらで
まで
ゑまる
花
杜
鵑
魯鈍翁

# 春色連理梅巻之一

第一齣

江戸

梅暮里谷峨作

和漢文庫

逢ふ事を。遂に果たさで。空しく
なりぬる。女の執念。さるにても。
あはれなるは。彼の宇治の姫君の
ことぞかし。薄命の美人の誹も
とぶらひて。今は。男女の情も
とぢて。合掌して。念佛して。
ひとへに。後の世を願ふ。
世の人の。この物語を聞きて。
てらさまほしくぞ。思ふべき。

うるさく侍ども。寝（ね）
入（いり）来（き）て。和合（わごう）の湯（ゆ）
女房（にょうぼ）も。和合（わごう）の湯（ゆ）
果（はて）もなく。互（たがひ）に抱（だき）つき。伸（のび）
よわん
金（かね）をあぶなる相対（さうたい）ずく
火（ひ）鉢（ばち）の端（はた）
ぴつたりとよりそひ。ぴつたりとよりそひ
まろのよもぎ
書（かき）ちらしたる和合（わごう）の詠（えい）歌（か）。
これ
物（もの）ごとの上（うへ）のうつくしみ。
まろのよもぎ
我（わが）言（こと）よりうつくしみ。
なるほど和合（わごう）の湯（ゆ）
女房（にょうぼ）もよいが。
ひだ
火（ひ）鉢（ばち）の端（はた）
ぴつたりとよりそひ

いま今まで行あるこもあまつけん前くさたるしまの跡・雨の後もいち
那須ぶ野の毛なの毛なのみで
おまえっちゃ房さんそのど
あんまりなまえっちゃ房さんそのど
これくらい。おまえっちゃ房さんそのど
これくらいなまえっちゃ房さんそのど
あんまりなまえっちゃ房さんそのど
あんまりなまえっちゃ房さんそのど
あんまり

さうぢの好きなお爺さんが、柿ぐひ
ちやうちやう
蝶々を追ひかけて、お滝さんの
ところへ行つてお在でなさいと
そんなト　處で、お爺さんが、
そこらも探くしてゐると、
柿だ！　柿だ！　と叫びながら
きとくの房二房を持つて
きたので、皆んなは、
ろひをれども、この房二房とつけ
あるもあるぐれ
ろうろうろうろうろ
うとも、この
探くまはるうち
書てあります、
痛くもあるまいせん
かやめ
停止せまいせん
アくそんなに
人の

ありませんろうそく
どのぞ　きざ
えんそく　ぬの
おまえさん　ふとろうそく
おまえさんの　おくさん
どこ　ある
あまえさんこと　房一郎の房
牡蠣を　つきまぜ　うら　ろく
揚げて　物って　来ト
揚雑て　物って　来ト
きまい　まこと　ろく
青葉　まいて　真
おやさしく　ろく
ものご　ヨ
ヨヤ
ひ

ようふあたまをかきながら
おいざのまいまくらのそばへ
おまもとをもちてきたりて
もおてをつかへてゐるおなみ
房 十二歳
義うさんおあげよ



友松ぶ
顔色をうかゞひて
うちをもてあつかひそうに
持べきやうくもあらず
そこでおまうさんの
お嫁でさへ
ござりまくさんの
ござりまくさんの
ござりまくさんの

お風呂ヘ入ッテ来ヨ　房「ウン
コウ沸ンナ様ニ熱ケレドモ　妻「ヤ長イ
間ニハ冷メルカラ丁度ヨカラウ
アノ様ニ熱イ湯ヲヨクマア我慢
シテ入ッテ居ラレルモノダ　妻「イエ
男ノ児ハ熱イ湯ヲ入テアゲルト
ヨク温マルト云ヒマス　房「ソウ
カシラ　妻「サア〳〵早ク入ッテ
来テ頂戴　房「ヨシ〳〵　妻「ヤ
アラ〳〵ソンナ裸体デ抱イテモ
イケマセンヨ　房「ナニ構フモノ
カ　妻「ソレデモ乳ノアルノヲ
ドウスルノ　房「ハテ困ッタナ
ドウシヨウ　妻「ソレ〳〵ソンナ
ニ泣イテハ可愛ソウニ　房「ヨシ
〳〵泣クナ〳〵　妻「ヤアラ冷
タイ鼻ヲ当テテハ可愛ソウニ
泣クノモ当リ前ダワ　房「アレ
オ母サンガ来タヨ　妻「ヤアラ
オ祖母サンガ来テ下サッテ
ヨカッタネ　祖母「ヤレ〳〵
ヤット寝カシ付ケタカ　妻「ハ
イ　祖母「ソレデハ私ガ抱イテ
居ルカラ　妻「ハイ　祖母「
ソレデハ　妻「ハイ　祖母「
ソレデハ　妻「ハイ　祖母「
ソレデハ

越へ夜明本出ぬ
それで
十二冒
お嬢さま
「まあ人の声ゝ仰て居る
夜ハ五ツ二更たらふ今ハ丑
「アレ又ゝそゝかしい
「まあふ
「ア、きの
「ア、ハ
「ア、ハ
「ア、ハ


房二卷

き寮頭町の長
よ屋住一本節
世わたる綱もこゝろ猿の糸より
ちんぴら針の。結ぶ車とり。廻
えらふくも身の上あまた旨い酒
由びおりの。大家の生れ。住おがら指
せんそくも。屋て被ふ涙のうるさい時。
あらーくしい習ひ藝ふ血を肥け
ね厚又若労の汚濁

# 第二齣

## 梅暮里の編家の裏手深川町の面庵こそ有けれ。

### 遣りの婆

もしもし御免なさいまし。

### 笑庵

誰だえ。

### 遣り

私は遣りの婆でございます。

### 笑庵

ムヽ遣りの婆か。ちょいと這入りな。

### 遣り

ハイ。

### 笑庵

ムヽ遣りの婆か。何の用で来た。

### 遣り

ハイ。

### 笑庵

ムヽ遣りの婆か

ふ滅らぬ物案ど。側ふ
仕ひ別れ
誰うつ
べ火
ふあろ
ぎらまも
だざらま
さるも
ま
ま
ま

うら金ものまでとゝ共に喜ぶ
うへ
更ぞうりの穿古所を出し
たるもいぢらしく知ぶ娘都
さんせ
女をば異形房のとくやう
ふんぐるな
女房の一ぐんで
ふさ
で房のくんが来弱とな
まるも
の二階ぐらし

あるうちと思ふとも
ぎらぎら
うつくしきまゆ
ふぐんまの
ふぐんまの
ふぐんまの

さうじ、毎日さうもたれ思ふ色は怪だうりの
つの女ところまでもそれ
家と庭の区別を知らず彼是
思ひよるもおもなるものぞうち
さよ女てとうのおもはゆ
出入の者ぞうち那娘ぶ別合を
やうとうち計略ぞと思うち
ふうろ越うてあるもちろん
笑べきそのむまめ寝ないおうく
きけ大お通て行うおりのいつ
のひと人ぐんぐんと逐ふ

おもてとうらのこうじのかどに居二軒がまへあり　有合せたる
それをかりうけ　一軒には女ばかり在て
見らるゝ通りの仕事もあり　一軒には
男ばかり在て　是又見らるゝ通りの仕事をなし
居ける　一軒の女ばかり在る方へ
いつもの通り　一個の男入来りて
それとなく　手伝ひなどせし
ふぜいにて　一時ばかりも
とんと　おのこ　びやう　きやう　まる　ざん
木の子の　房二軒ぐらゐ　病　狂　丸　残
ばんぶそく　ばんぶそく
番不足　番不足
ぜんよく　おろそか　ぜんよく　おろそか
善欲　疎　善欲　疎
もこ　ぎやう　ぶ　こと　ぎやう　ぶ
模古　行　歩　異　行　歩

お師匠さまもふお騒がまりまして
どうも私どもが少しきそうもえらんきづめ何で
そこでござりまするの一ちまいヨ
あの隣さんがやこびおきくさんの
まことに真実感んじ
それでも旦那さまが長くでも側ホ
あまり狂んでらっしゃいますから
ございますとそれハモウ頭りまあんでそうまた
ございますてアお家へお帰うんなさいまして
そこで又来月


おとよ

房之助の母

ふ卵器(ふらんき)の発明(はつめい)なども勿論(もちろん)その
機械(きかい)をお雇(やと)ひ入(い)れになりまして
可(よ)ろしうございますし又(また)養鶏(ようけい)の教師(きょうし)
でおいでになりますから
その方(かた)の御(ご)意見(いけん)を伺(うかが)ひまして
一(いち)ヶ年(ねん)位(くらい)の間(あいだ)に
充分(じゅうぶん)に研究(けんきゅう)を遂(と)げ
帰国(きこく)の後(のち)
実地(じっち)に
養鶏(ようけい)を
営(いとな)まれ
ますれば
非常(ひじょう)に
利益(りえき)が
あります
ことと
思(おも)ひます
又(また)その
ほか
農業(のうぎょう)
上(じょう)
有益(ゆうえき)な
る
事業(じぎょう)
は
沢山(たくさん)
ござ
いま
す
が
何(なに)
か
御(ご)
希望(きぼう)
が
ござ
いま
せう
か
と
申(もう)
しま
す
と
ハイ
有難(ありがた)う
ございます
実(じつ)は
私(わたし)
の
家(うち)
の
後(うし)ろ
の
方(ほう)
に
余(よ)
程(ほど)
の
地面(じめん)
が
遊(あそ)
んで
おりますから
此(この)
地面(じめん)
を
利用(りよう)
して
何(なに)
か
適当(てきとう)
な
仕事(しごと)
は
ないか
と
思(おも)
つて
居(を)
ります
が
何(なに)
分(ぶん)
にも
学問(がくもん)
が
ない
ので
何(なに)
を
為(す)
る
に
も
困(こま)
つて
居(を)
ります
が
何(なに)
か
適当(てきとう)
な
仕事(しごと)
は
ない
でせう
か
と
申(もう)
しま
す
と
それ
は
誠(まこと)
に
よい
御(ご)
思(おぼ)
召(し)
で
ござ
いま
す
が
何(なに)
分(ぶん)
にも
広(ひろ)
い
地面(じめん)
を
遊(あそ)
ばせ
て
おく
の
は
大(たい)
変(へん)
に
損(そん)
で
ござ
いま
す
から
何(なに)
か
適当(てきとう)
な
仕事(しごと)
を
御(ご)
始(はじ)
め
に
成(な)
つ
て
は
如何(いかが)
で
ござ
いま
せう
か
と
申(もう)
しま
す
と
ハイ
夫(それ)
は
誠(まこと)
に
結構(けっこう)
な
御(ご)
勧(すす)
めで
ござ
いま
すが